



医学研究科長・医学部長二期目にあたったの抱負

医学研究科長・医学部長 本 間 研 一



医学研究科長・医学部長二期目にあたって、抱負を述べたいと思います。私の第一期目は、主として法人化国立大学における医学研究科・医学部の運営基盤の設計・整備に時間とエネルギーを費やし、その結果、医学研究科の再編、学士編入入学

時期の半年前倒し、連携研究センター・フラテの設置、東北研究棟の自力改修、教員組織の再編成、人事制度の柔軟化、予算編成法の改定、教授会などの管理運営体制の簡素化、医学部創立90周年事業などを実現することができました。第二期目は、これらの改革を実質化して行きたいと考えています。

大学院教育の実質化

大学院を再編し、従来の6専攻を1専攻としました。そのねらいは、複数の指導教員による多面的な教育の実施と、基礎臨床を問わない融合的研究の促進にあります。また、大学院に進学する学生の多様化に対応してコース制を導入し、目標に応じた教育の展開を図ります。今回の再編の目玉の1つに、**連携講座**の設置があります。これは、日本では弱いといわれている臨床研究を促進する目的で、症例が豊富な大学外の医療機関で大学院生を実践教育するものです。すでに9の医療機関との間で協定書が交わされ、早ければ今秋から大学院生が臨床の第一線で研究指導を受けます。また、**学位審査制度**が改正されます。従来は学位論文の要件として、査読制度のある雑誌に掲載されていること、あるいは掲載が確約されていることが求められていました。これは、学位論文の雑誌掲載を促進するとともに、学位論文の質を保証する方法として全国的に行われているものでありますが、雑誌掲載にともなう時間の確保などが課程博士の制度になじまないこと、現在、研究論文の誌上発表は研究者の義務として定着していること、雑誌によっては査読者の質が必ずしも良好でないことなどから、従来の配慮は必要ないとの結論に達し、今回の改正に至りました。また、学位

授与を基準期間（4年）内に実施することも改定のねらいとなっています。今年度と来年に学位審査トライアルを行い、新制度をスムーズに導入したいと考えております。なお、大学院生に対する医学研究科独自の奨学金制度の設立を検討中です。

学士編入学時期の前倒しに伴う医学部カリキュラムの改正

本年度より学士編入者の入学が10月となったことから、医学専門科目が2年次後期（第3期）から開始することが可能となりました。そこで医学部カリキュラムの改正を行うことにしました。現在のカリキュラムは、臨床実習の充実をはかる目的で実習期間を半年延長して5年次前期より開始しましたが、その結果、講義や基礎系科目の実習が従来と比べ15-30%ほど減少し、また履修期間が短縮、集中化されたため、履修科目の消化不良が目立っています。「自学自勉の習慣」や「問題解決能力の涵養」が重視されている現在、現カリキュラムの問題点を早急に改正する必要があります。一方、文部科学省の強い指導によりコア・カリキュラムが導入され、CBTが実施されています。コア・カリキュラムの理念は、学部の医学教育において必要最低限の履修範囲を定めるものです。コア・カリキュラムに加えて、各大学の特色を生かした履修科目が設定されることが目的でした。ところが、現在その理念が拡大解釈されつつあり、履修科目範囲だけでなく授業方法や評価方法まで、医学教育を全国的に統一しようとする動きがあります。本来、教育科目は各大学の建学理念や方針によって決められるべきもので、金太郎飴のような医師を創ることは想定されていません。今回のカリキュラム改正では、コア・カリキュラムを見据えながら、北大の特色を最大限に出したものにしたいと考えています。なお、カリキュラム改正と同時に、成績評価方法や進級条件についても見直したいと考えています。

医学部入学者選抜制度の再検討

現在、医学部では一般入試・前期試験の他に、後期試験、学士編入試験、帰国子女特別選抜試験、国費および

私費留学生入学試験と5種類の選抜試験を行っております。しかし、導入当初の社会状況や条件が変化していることや、業務の増加により教職員のエフォートが入試にかなり割かれていることなど、現状の入試制度は様々な問題を含んでいます。そこで、法人化された国立大学間で競争や部局の特殊性なども考慮して、新しい選抜制度を設計したいと考えています。

大学法人中期目標・計画の達成度、業績評価への取り組み

平成19年度から、法人化大学の中期目標・計画に対する達成度評価などの作業が部局単位で開始されます。内容は、個人単位の研究評価と組織単位の教育評価です。大学としては初めての経験ですが、北大医学部はかつて大学評価機構による研究評価を受けており、その経験が役に立つのではないかと期待しております。これに関連して、従来毎年行われていた「医学研究科・医学部研究活動」報告書を廃止し、3年ごとの資料集として「医学研究科・医学部白書」を作成することを提案したいと考えております。

平成20年度グローバルC O Eへの申請

21世紀C O Eの後継プログラムとして登場したグローバルC O Eの募集が平成19年度から開始されました。今年度の対象分野で関連するのはライフサイエンスで、ここに応募するプログラムが先端生命科学院を中心に企画され、医学研究科の教員も参加しています。しかし本番は来年度の募集分野であるメディカルサイエンスで、医学研究科をあげて最強の案を作成する準備を開始する予定です。

医療イノベーション拠点形成事業の推進

昨年度、医学研究科と先端生命科学研究院の共同提案で採択された未来創薬医療イノベーション拠点形成プロジェクトの医学研究科・日立製作所担当分である医療イノベーション拠点形成事業を推進し、当面の目標である2年後の中間審査を成功裏に通過したいと考えています。イノベーション研究の一部は連携研究センター・フラテにおいて実施されますが、北大病院や北大アイソトープ総合センターとも協力し、大きな研究拠点を形成する予定です。

事務職員・技術職員の定員削減・一元管理への対応

現在、教育研究の第一線である分野等の事務業務は、大学機能として重要な位置を占めているにも関わらず、ほとんどすべてが正規職員以外の方々に委ねられています。どんな職業分野でもそうですが、第一線の現場では、臨機応変の柔軟性、迅速性、実効性が求められ、昨今の事務業務の多様化、複雑化、国際化から、その業務遂行

には高度な知識と熟練性が要求されています。それにも関わらず、現在の雇用体制には多くの問題があります。背景や原因を詳しく述べることは別の機会にしますが、研究教育の第一線を維持するためには、何らかの方策が必要です。現在いくつかの可能性を探っているところで、近々構想を提示したいと考えています。

一方で、技術職員の定員削減と人事の一元化が計画されています。医学研究科は技術職員2名の削減が割り当てられており、方法としては退職後不補充がとられます。しかし、医学教育研究には欠かせない業務もあり、機械的な退職後不補充では現場が混乱します。そこで、今回医学教育開発室を改組して医学教育支援室とし、主として学部教育に不可欠な業務を担当する職員を配置することになりました。今後は、医学研究科共通の技術業務に対して、職員を重点的に配置していく予定です。

医学部創立90周年記念事業の本格的推進

昨年9月から開始された医学部創立90周年記念事業ですが、今回その本格的推進を目的として90周年事業推進室を設置しました。現在、非正規職員2名で主として募金業務を担当しています。現在まで1億3千万円ほどのご寄附を頂きましたが、来年3月までに7億円集めなければ2009年度の医学部会館建設は困難になります。今後、企業巡りや全国キャンペーン、北大医学部フラテ祭の開催などで募金活動を盛り上げたいと考えています。なお、本誌にも募金状況が掲載されています。

連携研究センター・フラテの整備

昨年4月に発足した医学研究科連携研究センター・フラテの基幹研究施設が入る東北研究棟の改修が本年7月中旬に終了予定です。東北研究棟の2階から5階までの約540㎡がセンターのオープンラボとなり、2階に連携分野「分子イメージング部門」、3階に「光生物学分野」が入ります。4階と5階のオープンラボは当面は改修工事の移転先として使用されます。東北研究棟竣工と連携研究センターの実質的開設を記念して、本年7月17日(火)にお披露目ツアーと祝賀会が行われます。

中研究棟の耐震改修計画の推進

医学研究科研究棟の耐震改修計画で、最後に残った中研究棟の改修を平成20年度概算要求として提出しました。もし概算要求が通ると、平成20年10月頃から工事が始まることになります。仮移転先も研究科内で何とか確保できる目処がついていますが、同年着工予定の医学部会館の建設と時期がぶつかる可能性があり、周辺はあわただしくなります。

大学間国際交流・連携の推進

研究科内に国際連携室を設置し、留学生講師を配置しました。医学研究科の国際交流・連携の拠点として、今後様々な活動を展開していく予定です。さっそく、昨年度学部学生との交換プログラムを提案してきた香港大学リカシン医学院との連携を実現すべく、活動を開始しました。5月の連休には、私と吉岡副研究科長が香港大学を訪問し、英国式医学教育の一部を垣間見てきました。

附属動物実験施設の再開発

附属動物実験施設の改修は最終年度に予定されていましたが、耐震強度が文部科学省の改修基準より上回っているため、概算要求による改修はかなり先のことになりそうです。しかし、施設設備の老朽化により光熱水道料金を始め設備維持費に膨大な経費がかかっており、概算要求によらない施設の再開発を構想しなければならない状態です。この4月に動物実験施設再開発検討委員会を立ち上げ、年内をめどに再開発の具体案を作成する予定です。

医学研究科附属図書館の再開発

医学部会館の建設にともない、現在管理棟にある基礎講義室が2室取り壊されます。その前に、医学研究科図書館を再開発して講義室を用意するとともに、図書館機能を見直し、学部学生の勉学室やセミナー室、ロッカー室を確保したいと考えています。その構想を平成19年度中に作成し、平成20年度の早い時期に着工したいと考えています。

光イメージングセンター構想

(特別教育研究経費概算要求事項)の推進

平成20年度の概算要求(特別教育研究経費)として、医学研究科、先端生命科学研究院、電子科学研究所の3部局合同で、センター設置を視野に置いた光イメージング設備の導入を提案しています。北大は全国的にみても光イメージング研究が進んでおり、採択の可能性は高いと思われます。

医学部診療所改組による健康増進センター構想の推進

医学部診療所と保健管理センターを改組した健康増進センターを北大病院の近くに設置する構想が立てられています。医学研究科、歯学研究科、北大病院の3者によるメディカルゾーン再開発委員会を設置し、本格的な議論を開始する予定です。

道内3医大連携の促進

北海道大学医学研究科、札幌医科大学、旭川医科大学の3大学が連携して、オール北海道で各種事業に取り組んでいます。本年度は、文部科学省の橋渡し研究(TR)拠点形成プログラム、癌プロフェッショナル育成プログラム、大学院教育、学部教育における単位互換性、卒後医師養成プログラムの作成などを実施して行きたいと考えています。

以上2期目の抱負を簡単に述べましたが、どの1つをとっても実現には多くのエネルギーが必要です。皆様のご支援とご協力をよろしくお願い致します。

病院長就任御挨拶

北海道大学病院 病院長 浅 香 正 博



この4月より北海道大学病院長の重責をになうことになりました。北海道大学病院は923床の入院ベッドを有し、500余名の医師を含む1600人以上の医療関係者が働いている巨大施設であります。一般市民の健康を守る砦としてこれまでは順調な歩

みを進めておりましたが、平成16年度より実施されました独立法人化と新医師卒後臨床研修制度の影響を受け、現在はきわめて厳しい状況下に置かれるようになりました。国立大学が法人化されたとき、文部科学省は経営改善係数を設定し、前年の国立大学病院収入の2%の経営

改善を義務づけました。これが、大変な重みとなって国立大学病院の経営戦略を惑わせております。北大病院は約200億円の収入がありますので、毎年約4億円の増収を要求されることになります。実際には、文部科学省からの運営交付金が毎年4億円ずつ減額になってくるのです。働けば働くほど金を取られるという理不尽な制度です。これに加えて昨年は医療費が3.16%下げられたことにより、実質10億円もの増収が科せられたことになりました。定員増なしにこの目標を達成することは不可能なのに、一方で北大全体に定員削減の通知がきているのです。赤字になった場合、国からの補填処置は一切ありません。したがって、収入増につながる各診療科の努力と同時に支出を減らすために、材料費や薬剤費の節約に努めなけ

ればならなくなりました。

他方、新医師卒後臨床研修制度が発足してから卒後臨床研修を大学病院で行う研修医は年々減り続け、平成18年度は全国集計でとうとう50%を切ってしまいました。端的に言うと症例を多く診察でき、かつ給料の高い市中病院に研修医の多くが集まっていったと考えられます。北大病院においても平成16年度には103名いた前期研修医が18年度には59名と半減しております。後期研修医の減少も明らかとなった今、各診療科は生き残りをかけて、大学病院で診療できる医師を確保しようと試み、そのため地域病院に派遣される医師がますます足りなくなっ

きているのが現状です。したがって、このまま手をこまねいていれば、国立大学病院は診療に従事する医師数は減少し、経営どころではなくなって大学病院の最も重要な役割である高度先進医療ができなくなり、そのための基礎研究もストップする事態が生じかねません。このような厳しい状況の中、進路をどのように取っていけばよいのか日夜模索を続けております。明るい話題のない時期の就任ではありますが、北海道大学病院の究極の目標である個々の患者さんにとっての最適な医療の提供を目指してできることより努力していく所存でございますので、皆様のご協力をいただければ幸いに存じます。

副研究科長就任にあたって

放射線医学分野 教授 白 土 博 樹



平成19年4月1日から、期せずして医学研究科副研究科長を拝命し、吉岡副研究科長、野々村研究科長補佐、笠原研究科長補佐とともに本間医学研究科長をサポートする執行部の一員として職務を担当しております。放射線医学分野の科学者として

の役割、医師としての役割、教育者としての役割の他に、またひとつ大きな役割が増えた訳ですが、これも新米教授の宿命であると思って、笑って乗り越えねばなりません。体力と家族の続く限り……。

ところで、医学研究科という集団とは何なのでしょう……先日宴会の帰りに寄った地下鉄麻生駅の近くの古本屋で、ジャン・ジャック・ルソーの「社会契約論」（桑原武夫・前川貞次郎訳）を見つけました。岩波文庫で定価は星ふたつ★★でした。その題名を眺めながら、ふと「ヒントがあるかもしれない」という気がして、購入してみました。

ルソーに従えば、まず人間は自然状態に留まろうとしてもいろいろ障害があり、個人としての我々は非常に弱い。人間は新しい力を生み出すことはできず、ただすで

にある力を結びつけ、方向づけることができるだけであるから、生存するために取りうる手段としては、集合することによって、抵抗に打ち勝ちうる力の総和を、自分たちが作り出し、それをただひとつの原動力で働かせ、一致した動きをさせること、それ以外にはもはや何もない。この力の総和は、多人数の協力によってしか生まれ得ない、とあります。そして、国家はこれらの総和に共通の「一般意志」を実現するためにある、という話が展開される訳ですが、たぶん、医学研究科も、その全構成員の共通の「一般意志」をいかに反映するか、が求められております。ここでいう全構成員の共通の「一般意志」は、個々人の利益の和ではなく、全構成員のための利益であります。ここの区別が難しいところではありますが、時には個人的には不利益になる行動で初めて集団を守ることにも可能になる、とあります。

この本を読んでから、医学研究科の執行部の一員として自分自分が果たすべき役割と意義が見えてきたように思います。私の役割は本間研究科長をサポートするとともに、医学研究科の構成員の「一般意志」を実現するためにあると思います。若輩者ではありますが、2年間よろしく願い申し上げます。

新 任 教 授 挨 拶

保健学科放射線技術科学専攻 横 澤 宏 一



平成19年2月1日付けで医学部保健学科放射線技術科学専攻医用理工学分野の教授を拝命いたしました。企業に在籍していた私を教授に選任いただきました先生方・関係者の皆様に御礼申し上げます。

私は岩手県出身で、昭和55年に北海道大学に入学し、61年に理学部物理学学科の修士課程を修了した後、(株)日立製作所に入社しました。日立製作所では東京都国分寺市にある中央研究所に在勤し、主に医用機器の研究開発、特に生体計測用センサの研究を行ってきました。例えば、手術中の組織鑑別を目的とした針状の超音波プローブ、生体から自発的に発生する磁場やMRIの信号を検出するための磁力計、ガスや血液中のイオン濃度を計測する半導体センサなどを手がけました。この間、北海道大学工学部の大学院に社会人入学して3年間に在籍し博士号を取得しました。したがって北海道大学では、理学部、工学部に続いて、3つ目の学部として医学部のお世話になることになります。

これまで携わってきた医用機器の中で最も関わりが深かったのが、生体磁場計測装置です。生体磁場計測装置は対象部位別に「心磁計」(MCG: Magnetocardiograph)と「脳磁計」(MEG: Magnetoencephalograph)の2つに分類されます。まだあまり知られていない機器かもしれませんが、脳波や心電図が体表面電位を計測するのに対して、脳や心臓から自発的に発生する磁場を計測することにより、生体の機能が無侵襲で計測できる装置です。北海道大学には病院と医歯学研究棟に各1台の脳磁計が導入されていますので、着任後、さっそく脳磁計による脳機能計測の研究に着手しました。研究にあたっては、企業で医用機器の製品化を手がけてきた経験を活か

して、成果の特許化や産学連携による実用化にも留意し、研究成果が社会に還元されるよう心がけていきたいと考えております。

私が着任した保健学科の放射線技術科学専攻は、いうまでもなく診療放射線技師の養成機関です。医療技術の進歩に伴い、医用機器はますます高度化していきます。臨床現場の技師には、医用機器に精通して正確な検査情報を医師に提供できる技術的能力が、これまで以上に求められることになるでしょう。一方、大学病院では工学系など周辺の学術分野との共同を仲立ちし、多忙な医師と協力して学際的な研究を行う能力も必要とされるかもしれません。さらに新しい医療技術を提供し続ける企業においても、臨床経験を持つ研究開発者が必要とされます。これまで企業は主に工学系の新卒者を採用し、大学病院等に派遣するなどしてこの需要に対応してきました。しかし、このような場当たり的な研究開発者の養成には限界があります。保健学科は、臨床を学んだ経験を生かして医療現場のニーズに基づいた技術を発想、開発できる人材を育成できる貴重な機関であるように思えます。そこで教育にあたっては、医学と工学の学際的知識を背景にした研究開発能力の向上にも力を注ぎ、臨床現場のみならず、研究機関や企業の即戦力となる人材も育てたいと考えています。広い多様なキャリアパスを卒業生に提供することは、保健学科の存在価値を高め、医療全体の質を向上させていくものと信じております。

着任が冬でしたので、札幌に着いて駅頭で冷たい空気を吸った瞬間、不意に大学受験で初めて札幌に来た日のことを思い出しました。あの日もほぼ同じ季節で、今回と同じ場所で同じような気持ちで札幌の冷たい空気を吸ったはずです。新入学生のような初々しい気持ちで、教育と研究に全力で取り組みたいと考えております。

新任教授挨拶

保健学科検査技術科学専攻 石津 明 洋



平成19年4月1日付けをもって、北海道大学医学部保健学科検査技術科学専攻病態機能学講座病理形態機能学分野の教授に就任致しました。

私は、平成2年に北大医学部を卒業（66期）後、中川昌一教授（当時）が主宰されていま

した第二内科に入局致しました。学部学生時代より、生体内における免疫反応の結果として障害される腎糸球体に興味を持ち、入局後は腎グループへの配属を希望しました。大学病院では、糸球体腎炎の腎生検やネフローゼ症候群の治療など腎疾患を中心に勉強させていただくと同時に、関連病院では、全身を診れるようにとさまざまな疾患の患者を担当させていただきました。腎グループの諸先生方をはじめ第二内科や関連病院のみならずには、本当に心温かく接していただき、研修医として必要な知識・技術の修得ばかりでなく、医師として働くことの素晴らしさや苦しさ、その他もろもろのことを教わりました。私はその後、臨床を離れて基礎医学（病理学）の道を歩むことになりましたが、臨床医として過ごした数年間は私にとってかけがえのない経験であるとともに、その後の自分の研究を遂行するうえで不可欠なモチベーションともなっています。

大学院の3年目からは吉木 敬教授（当時）が主宰されていました第一病理に入門し、膠原病・自己免疫疾患の病因論について勉強させていただきました。研修医の期間に、根本的な原因がわからないまま治療にあたらないといけない病気がいかに多いかということを実感し、少しでも病気の原因に迫りたい、そんな気持ちで日々実験に取り組んでおりました。実験開始前に予想された結果とは実際は随分違った結論が得られたことや、論文として提示できるような、陽性対照と陰性対照がきちんととれて実験群のエラーバーが少ない結果を出すのに何回も同じ実験を繰り返したことで、皮膚の凍結切片が切れ

ずに日曜日に大学に来てクリオスタットの前で人知れず悔し涙を流したことなども、今となっては懐かしい思い出です。研究や実験のことばかりでなく、同僚や先輩・後輩達、講座のスタッフの方々との楽しい交流、そして時には熱い口論などもまるで昨日のこのように感じられます。大学院修了後、ニューヨーク大学で2年間のポスドクを経験し、平成11年10月からは今度はスタッフとして再び第一病理に迎え入れていただきました。以降、多くの大学院生や研究生と一緒に仕事をする機会がありました。

平成17年4月からは、縁あって医学部保健学科検査技術科学専攻に助教授として着任致しました。中村仁志夫教授（当時）のもと、臨床検査技師を目指す学生を対象に病理検査学や関連科目の講義・実習を分担させていただいておりましたが、本年4月より、中村先生のご退職に伴い、その後任として教授にご指名いただきました。

教授に就任するにあたって、ふたつのことを胸に刻みました。ひとつは、これまでそうでしたが、これからも、一緒に過ごしてきた仲間を大切にしようということです。かつて臨床医であった時、病理学の診療・研究を行う時、どんな時でも互いに支えあい叱咤激励しあう仲間があってこそ良い仕事ができたとします。臨床にしろ基礎にしろ、あるいは医師であれ臨床検査技師であれ、良い医療や研究は良いチームによってのみもたらされると信じています。そしてもうひとつは、医師としての初心に帰り、病に悩む患者のために少しでも役に立つ仕事をしようということです。医療専門職として高い技量を持つ臨床検査技師を育てることはそれに直結するでしょうし、今後設置される予定の保健学科大学院では、新しい病理検査法の開発や応用に取り組み、その成果を少しでも臨床の現場に還元してゆきたいと思っています。医療の進歩のため、教育・研究に微力を尽くす所存でございますので、ご指導ご鞭撻くださいますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

新任教授挨拶

北海道大学病院 病理部 松野 吉 宏



平成19年4月1日付で、北海道大学病院教授・病理部長を拝命致しました。当病理部は昭和50年10月、恩村雄太教授を初代部長（併任）として当時の検査部より独立して以来、30年余にわたり病理・細胞診断を通じて北大病院内外の診療・研究の基盤を支えて参りました。この間、松野誠夫病院長（当時）を初代に、相沢幹、松宮英視、長嶋和郎、吉木敬、笠原正典の各教授が歴代の併任部長として主宰され、業務自体は井上和秋、藤岡保範、清水道生の各助教授、現在の伊藤智雄講師と引き継がれた専任副部長により推進されて参りました。そのような系譜のなかで私は初めての専任部長という大命を仰せつかったことになります。

私は、昭和58年北海道大学医学部を卒業、病理学第一講座（現・分子病理）の相沢幹教授のもとで病理学の徒となったのち、昭和62年国立がんセンター研究所に採用されたのを皮切りに、国立がんセンターでは中央病院、がん対策情報センターとセンター内を渡り歩きました。最後にはすべて併任で掛け持ちする事になるのですが、しかし一貫して東京・築地でおもに腫瘍の病理診断学、とくに肺腫瘍・縦隔腫瘍・悪性リンパ腫を主たる専門とし、また、がんの病理診断精度や全国の病理診断の支援、臨床研究のための病理中央診断の支援などを自己のキーワードとして病理学的研究と実践に取り組んで参りました。

病理診断学は、主として臓器・組織・細胞等の形態変化を精密に評価することによって疾病の診断を確立する臨床医学の一分野です。従来の手法、経験と知識に則って精度の高い判断を迅速に行うことを旨とするのはもちろんですが、近年多様化する治療選択の根拠として種々の手段を用いての病理診断情報を求められるようになっています。当病理部は優れた技能・知識をもつスタッフ

により支えられてきましたが、今後ますます質量ともに高度化するであろう要請に応えられるような環境を整備していきたいと思っています。

一方、全国的な病理医の不足は深刻であり、人口10万人当たりの病理専門医数は米国の1/4から1/3程度にとどまっています。しかもその平均年齢は50歳代後半と高齢化が進んでいるとも言われます。将来の北海道そして日本の病理診断学を担う優れた病理専門医や技術者、そしてまた病理学的素養に裏付けられた知識・技能の深みをもつ優れた臨床医を育てていくことも当病理部に課せられた重大な使命のひとつであると考えています。

日常診断業務を最優先課題として実践しつつも、より高い精度を求める姿勢や学問としての病理診断学や関連分野の進歩に貢献し続ける態度を失わないようにしたいものです。これは当然、臨床各科や基礎医学研究分野との協力、良きパートナーシップのことも含めて申し上げます。そのようなresearch mindを持った病理医・病理技術者が私たちの部から、そして北海道からたくさん育ってくれることを目標にしたいと思っています。そのためには北海道内外の大学、地域の基幹病院・中核施設との横のつながり、人と情報の支援網を大切に、かつ具体的に育てて実効を挙げる必要が是非あります。それぞれの独自性はもちろん尊重しなければいけませんが、共有できるリソースを共通の後方支援としてより充実させて行く工夫が必要です。

当分は新米部長であるがゆえのご迷惑もおかけすることと思います。いろいろご無理を申し上げることもあらうかと思いますが、あらゆることは現在の、そして将来の患者さんのためであり、私たち病理部はその使命を果たすべく一丸となって邁進する決意です。各診療科をはじめ院内外の関連部署、医学研究科、事務部など関連する各位のご指導、ご支援、ご協力を改めてお願い申し上げます。

医学部保健学科講座紹介「看護学専攻母性・小児看護学講座」

医学部保健学科看護学専攻 教授 佐 川 正

平成19年6月現在、看護学専攻母性・小児看護学講座には教授3名（岩田銀子、佐川 正：母性・助産学分野、佐藤洋子：小児看護学分野）、准教授1名（平塚志保：母性・助産学分野）、助教4名（島 明子、中澤貴代、林 佳子：母性・助産学分野、伊藤紀代：小児看護学分野）の計8名の教員がおります。小生は北大産婦人科講師から平成12年4月に北海道大学医療技術短期大学部（医短）教授として赴任しましたが、平成15年10月に北海道大学医学部に4年制の保健学科が設置されたのに伴い、同学科看護学専攻母性・小児看護学講座母性・助産学分野教授を拝命しました。平成16年4月には保健学科の第1回入学式が挙行され、平成19年4月6日には第4期生194名（看護学専攻75名、放射線技術科学専攻41名、検査技術科学専攻39名、理学療法学専攻20名、作業療法学専攻19名）が入学して、1年～4年までのすべての学生が揃いました。さらに、平成20年度には大学院修士課程、平成22年度には大学院博士課程の設置が予定されています。また、従来の医短は平成19年3月に専攻科助産学特別専攻の修了をもちまして閉部しております。

産婦人科医師不足と関連した報道が連日のようにマスコミに取り上げられていますが、助産師不足も深刻な問題であり、折角の機会ですのでこの問題と助産教育について少し述べさせていただきます。

平成16年9月の厚労省医政局看護課長通知により看護師の妊婦に対する内診が全面的に禁止されたにもかかわらず、看護師に内診をさせていた神奈川県産婦人科病院に強制捜査が入り、保助看法違反の容疑で院長、助産師が逮捕された、いわゆる「看護師内診問題」は記憶に新しいところですが、この事件の背景には極めて深刻な助産師不足があります。小生は保健学科で看護学生・助産学生に講義をする際には、助産師を目指す看護学生が一人でも増えるように工夫をしております。具体的には、看護の2年女子学生には基礎体温を測定させ、基礎体温の変化から自分の内分泌動態を考察し、自分の体の変化をホルモン動態から考えるというレポート課題を毎年与えております。また、看護の3年女子学生には希望者を対象に、夏休みを利用して北大産婦人科の関連病院で分娩見学を行っております。昨年は学生12名が4グループに分かれて4泊5日の日程で、千歳市民病院で分娩見学をさせていただきました。このような試みにより、看護学生が母性看護学・周産期医療に興味を持ち、将来助産師になりたいという動機付けになればと思っております。

助産師を目指す助産学生は北大医短の時代には専攻科



後列：島、伊藤、平塚、林、中澤
前列：佐川、岩田、佐藤

で定員20名がございましたが、北大保健学科となってからは半減してしまいました。近年、助産師養成施設の受験倍率は他と比べて高いと言われ、助産師志望の看護学生は多いのですが、全国の大学における助産選択コースの定員は平均8名とかなり少ないのが現状です。このように定員が少なくなった一番の原因は、分娩実習施設の確保の困難さが挙げられます。本保健学科の場合は、分娩実習施設が遠隔地に点在しているため、実習指導教員が稚内→函館→八雲というように連日飛び回らなければならないという過酷な勤務状況にもあります。また、助産学実習における学生の分娩介助回数は学生1名につき10回と定められています。この回数については、あまり厳しく守らなくても良かった時代があるようですが、平成17年2月1日に参議院で小泉前総理が分娩介助回数に関する円より子議員の質問に答弁してから、この10回という分娩取り扱い回数の確保が厳しく求められるようになったことも定員が少なくなった一因と考えられます。また、以前は大学病院には助産学生用の産泊室があり、助産学生と実習指導教員が泊り込んで分娩介助を行っていましたが、社会状況の変化によりこのような夜間の実習を行えなくなったことも、定員数減少と関連があるのかもしれません。

助産師教育を大学院修士課程（2年間）で行っているのは現在3校（天使大学、聖路加看護大学、国際医療福祉大学）ありますが、北大で将来的に大学院で助産師教育を行うかについては、今のところ具体的な話になっていないようです。大学院で助産師教育を行うことになると、修業年限が全部で6年間となり医学部医学科と同じになります。助産師教育にそれほど長期の教育が必要なのか、また、助産師不足の深刻な診療所にどれだけ大学院出の助産師が勤務するのかという疑問も残ります。

産婦人科医師の負担を軽減する方法として分娩を取り

扱う施設の集約化が盛んに行われておりますが、一方であまり問題のない妊婦を妊娠後期から助産師が「助産師外来」で健診し、「院内助産所（科）」で分娩するという方法も注目されています。いろいろな意見はあるでしょうが、助産師が助産師外来で十分な健診をできるように、小生は「妊娠期の超音波診断」を助産診断技術学Ⅲ（助産選択コースの集中講義）で講義することとしました。院内助産所では助産師外来に通っていた妊婦を助産師がフリースタイル分娩で取り上げることが多いようです。フリースタイル分娩は助産師の間で大変なブームになっており、小生も平成17年度の卒業研究のテーマとして取り上げましたが、分娩台を使用せずに妊婦の意向に合わ

せて側臥位、四つん這い、立位などで分娩するものを指します。産婦人科医師と助産師との間には、分娩についての考え方にかなりのギャップ（分娩時の安全性の重視か、妊婦の快適性・自主性の尊重か）があると感じておりますので、講義などを通じてこのギャップを埋めることも小生の仕事と考えております。

現在、看護学専攻母性・小児看護学講座には前述しましたように8名の教員がおりますが、医系の教員（保健学科では我々医師はこのように呼ばれております）は小生一人であり、医系教員の立場から、主に助産教育の現状について報告させていただきました。

医学研究科・医学部医学科

「優秀研究賞」「優秀教育賞」「優秀論文賞」「特別賞」について

副研究科長 吉 岡 充 弘

平成17年度に「北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰内規」が制定され、今年度は第2回の顕彰となりました。この顕彰は「優秀研究賞」、「優秀教育賞」「優秀論文賞」および「特別賞」の4賞からなり、それぞれ顕著な研究業績をあげた専任教職員、顕著な教育業績をあげた専任教職員、特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等に、そして国内外において顕著な社会貢献をされた方々に対し授与するものです。この顕彰には、様々な難題を抱えた中での法人化への船出を迎え、活力のある医学研究科発展へのきっかけとすべく思いが込められています。すなわち、医学研究科構成員を元気づけるような活発な活動をされている方々に光を当て、その功績を称えることで、医学研究科を活性化していきたいとするものです。

平成18年度受賞者は、優秀研究賞として清水宏皮膚科学分野教授、また特別賞として高桑栄松北海道大学名誉

教授、宮崎亮氏に決定いたしました。

《優秀研究賞》

「皮膚疾患の病体解明と

新規分子標的治療法の開発の研究」

清 水 宏 教授

清水教授は慶応大学医学部のご出身で、北大教授に就任して8年目を迎えました。清水教授の皮膚科学分野は医学研究科のなかでも最もアクティブな分野の一つです。最近の3年間の英文論文は130編を超え、教室員一人ひとりの努力と熱意の賜物と清水教授は敬意を表しています。様々な研究テーマの中でも、「道化師様魚鱗癬」という重症遺伝性皮膚疾患の原因遺伝子を同定した論文（J Clin Invest 115:1777-1784, 2005）をはじめ、世界で初めて作成に成功した表皮水疱症ならびに水疱性類天疱瘡の疾患モデルマウスの論文（Nature Medicine 13:378-383, 2007）は、高く評価されています。

このようなアクティブな教室の研究成果を反映して、最近相次いで3名の教室スタッフが他大学の主任教授として旅立ちました。2005年10月に清水忠道講師が富山大学医学部皮膚科主任教授に就任、2006年7月に西村栄美特任助教授が金沢大学がん研究所幹細胞医学研究分野教授に、そして2007年2月に澤村大輔助教授が弘前大学医学部皮膚科主任教授にそれぞれ栄転されています。

今後とも、世界をリードする成果を北大から発信し、さらにその結果を臨床に還元していただきたいと願うものです。



受賞者を囲んで

《特別賞》

「医学研究科・医学部における

人材育成の援助および国際交流の促進」

高 桑 榮 松 名誉教授

高桑榮松名誉教授は北大医学部第17期生で、3ヶ月の繰上げ卒業と共に日本は第2次世界大戦に突入した激動の時代を経験されてきました。1954年に米国政府主催の選抜試験（3600名以上の応募者）をパスして40名が米国に留学しました。その機会に初めて各国を歴訪し、新しい文化にふれて大きなカルチャーショックを受け、敗戦後のわが国のあり方に思いを新たにすると伺っております。敗戦のコンプレックスの中で、各国の平和共存を達成するためにはどうしたらよいかと考えられたそうです。そこで氏はまず日中友好に注目されました。高桑榮松学術交流基金を立ち上げ、ハルビン医科大学との国際交流を開始したのです。ハルビン医科大学から多くの留学生が北大を訪れ、学位を取得し、帰国後は自国の優秀な指導者となっています。さらに氏は、医学の発展は利害得失を超越して人類の平和に貢献することと考え、この目的のため高桑榮松奨学基金制度を設立されました。この奨学基金制度は、医学研究科・医学部における人材育成に多大な貢献を果たしてきました。氏のご健康を祈念するとともに、今後とも、人材育成の援助および国際交流の促進にご尽力いただけるよう願っています。

《特別賞》

「アフリカ・アジアの最貧地方における

献身的国際医療活動」

宮 崎 亮 氏

宮崎 亮氏は北大医学部30期生（昭和29年卒業）で、卒業後ニューヨーク大学メディカルカレッジにおいて、チーフレジデントとして外科・泌尿器科を専攻し、7年におよぶ研修・研究を続けるとともに、アメリカの貧困層の実状を知る機会を得ました。この経験を契機として、氏は1963年から、アフリカ、ナイジェリアにおいて医療活動を行うことになりました。さらに、1980年からはバングラデシュにおいても医療活動を開始し、現在も継続されています。

飢えと貧困、そして激しい内戦に苦しむ人々に対して、医療を提供することは医療の原点ともいえるべき活動といえます。さらに、電気をはじめ医療を展開するのに不十分な環境の中で、治療のみならず予防医療に尽力されてきました。77歳という年齢でありながら、貧しく医療から見放された人々のために献身的な医療活動を継続されています。現在は日本におられますが、体力の回復次第、又バングラデシュへ行き、手術をされるそうです。氏のご健康を祈念するとともに、国際医療活動のリーダーとして、ご活躍されることを念願しています。

三大学の単位互換性に関して

副研究科長 白 土 博 樹

臨床系連携講座に続いて、新たな他機関との連携体制が生まれました。

平成19年5月8日に、「北海道大学大学院医学研究科、旭川医科大学大学院医学系研究科、札幌医科大学大学院医学研究科及び保健医療学研究科との間における単位互換に関する協定」が結ばれました。これにより、各研究科の大学院学生が、相互に相手研究科の授業科目を履修の上、単位を修得する道が開けました。現在、本研究科が受け入れる学生数や、他大学の大学院生が履修できる授業科目や手続きについて笠原先生を中心に教務委員会で検討中であります。



医学部創立90周年記念事業基金募金活動の現況 ー第2報ー

医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長 小山 司

医学部創立90周年記念事業に向けての募金活動がスタートして9か月が経過しました。医学部教員はもとより同窓会会員の皆様、また関係各方面から、多額の募金をいただき心よりお礼を申し上げます。なお、5月末現在の募金の納入状況は表のとおりとなっています。

本年4月からは、「医学部創立90周年記念事業推進室」を新設し、廣重力記念事業後援会会長と本間研一記念事業実行委員会委員長が中心となって、募金活動の対象を医療関係企業及び一般企業にも拡大し、本格的な募金の要請を展開しています。

これら学外関係者の皆様の賛同を得るためにも教員の募金率100%の達成は一日も早く実現したいと願っています。現在、約45%の募金率となっています。教員諸兄におかれましては、なお一層のご理解とご協力をお願いする次第でございます。

表：寄附金納入状況（19.5.31現在）

寄附金合計 134,615,396円		
◎教員	155名／349名（44.4%）	32,350,000円
（内訳）教 授	62名／82名（78.0%）	19,020,000円
准教授	27名／56名（48.2%）	5,200,000円
講 師	22名／55名（40.0%）	3,930,000円
助教・助手	42名／156名（26.9%）	4,200,000円
◎分野	3件	3,000,000円
◎同窓生	406名	64,555,511円
◎学生の父母	53名	6,449,885円
◎法人等	32件	27,660,000円
◎篤志家(団体・個人)	5件	600,000円

ご寄附いただいた企業等

医療法人英生会野幌病院
医療法人王子総合病院
医療法人溪仁会
医療法人耕仁会札幌太田病院
医療法人康清会
医療法人新日鐵室蘭総合病院
医療法人正観会御野場病院
医療法人徳洲会札幌徳洲会病院
医療法人社団いぶり腎泌尿器科クリニック
医療法人社団エス・エス・ジェイ札幌整形外科循環器病院
医療法人社団カレスアライアンス
医療法人社団慶愛会札幌花園病院
医療法人社団恵水会田島クリニック
医療法人社団五風会さっぽろ香雪病院
医療法人社団司馬内科クリニック
医療法人社団修道会本田病院
医療法人社団苫小牧緑ヶ丘病院
医療法人社団平成醫塾苫小牧東病院
医療法人社団朋友会
医療法人社団友愛会恵愛病院
医療法人社団我汝会えにわ病院
特定医療法人社団カレスサッポロ
特定医療法人社団千寿会三愛病院
特別医療法人明生会
総合病院伊達赤十字病院
糖生会大通り内科クリニック
株式会社スクウェア・ワン
株式会社太陽グループ
株式会社難波薬局
北海電気工事株式会社
北海道厚生農業協同組合連合会
北海道大学医学部精神医学教室同門会
北海道大学大学院医学研究科腎泌尿器外科学分野
北海道大学泌尿器科同門会

(50音順)

お知らせ

◆ 春の叙勲に廣重元総長（元医学部長） ◆

廣重元総長（元医学部長）の長年にわたる教育・研究等への功績と我が国の学術振興の発展に寄与された功績に対し、本年4月、春の叙勲において「瑞宝重光章」が贈られました。

先生は、昭和39年12月本学部助手、同42年8月同助教授、同50年7月同教授に就任し、同62年7月から2期4年にわたり医学部長を併任、平成3年5月から4年にわたり北海道大総長に在任されました。同7年4月任期満

了により退職し、同年5月に本学名誉教授号を授与されました。また、平成8年4月から、大学入試センター所長、同11年4月から学校法人東日本学園北海道医療大学長、同17年3月からは、学校法人東日本学園理事長を歴任し、現在に至っています。

なお、瑞宝重光章伝達式は、5月8日（火）皇居にて行われました。

◆ 医学研究科「東北研究棟」竣工披露並びに祝賀会について ◆

昨年から工事を進めてまいりました東北研究棟の改修工事が7月13日に完了し竣工の予定となりました。

については、下記により施設の披露並びに祝賀会を開催いたしますので、皆様お誘い合わせの上、ご出席下さい。

記

日 時：平成19年7月17日（火）17時30分～

集合場所：東北研究棟5階「実験室」

（エレベーターを降りて左側）

（17時25分までにお集まり願います。）

施設披露：17時30分～18時00分

祝 賀 会：18時00分～19時00分

会 場：医学部学生食堂

◆ 北大医学部フラテ祭の開催決まる ◆

医学部創立90周年記念事業行事の一環として、北大医学部フラテ祭を開催することとしました。詳細については8月号でお知らせしますので、多数の参加をお願いします。

日 時：平成19年9月22日（土）13時30分～

場 所：北海道大学医学部

内 容：第1部 講演会

第2部 ラボ・キャンパスツアー

第3部 懇親会

※ 参加は無料です。

主 催：医学部創立90周年記念事業実行委員会

共 催：医学部同窓会、医学部学友会

◆ 第26回高桑榮松奨学基金授与式の挙行 ◆

北海道大学大学院医学研究科・医学部高桑榮松奨学基金要項に基づく、奨学金及び奨励賞の授与式が去る、3月16日（金）副研究科長室において挙行されました。被授与者は次のとおりです。

1. 優秀にしてかつ健全な学生に対する奨学金の授与

長 尾 幸 衣（医学部6年次：卒業生総代）

干 野 晃 嗣（医学部6年次：卒業生総代次席）

2. 優れた業績をあげた研究者に対する奨励賞の授与

古 本 智 夫（循環病態内科学分野特任助手）

宮 武 由甲子（分子病理学分野学術研究員）

3. その他基金の目的にかなう者に対する助成等

（外国人留学生・研究者）

金 学 海（病態制御学専攻博士課程3年次）

◆ 外国人留学生と教職員・学生の情報交換会の実施 ◆

昨年、7月に北海道大学大学院医学研究科・医学部に設置された国際連携室（通称「国際連携室」室長：吉岡副研究科長）主催による第1回外国人留学生と教職員・学生の情報交換会が去る、4月26日（木）18：00～医学部第3会議室において開催されました。

当日は、留学生12名、外国人客員研究員1名、在学生11名、教員3名 計27名の参加があり、終始和やかな雰囲気の中、開催されました。



◆ 平成19年度 大学院入学状況 ◆

修士課程

専攻名	定員	入学者数
医科学	30	27

博士課程

専攻名	定員	入学者数
医学	100	101（6）

（ ）内は留学生で内数

◆ 平成19年度 医学部入学状況 ◆

平成19年度の北海道大学入学式が去る、4月6日（金）午前10時から札幌コンベンションセンターにおいて、午後2時からは医学科入学式が臨床大講堂において挙行されました。医学科入学式では、本間医学部長の告辞、浅香北海道大学病院長の祝辞の後、入学生を代表して、相河伸俊君が入学者宣誓を行いました。

医学部の入学者は、医学科95人、保健学科194人の計289人で内訳は、次のとおりです。

平成19年度 医学部医学科入学状況

医学科	試験区分	入学者数		内 訳				
				道内高校出身		左記以外		現 役
	前期日程	80	(8)	43	(6)	37	(2)	30 (5)
	後期日程	15	(3)	7	(1)	8	(2)	8 (3)
	合 計	95	(11)	50	(7)	45	(4)	38 (8)
	【参考：18年度】	95	(18)	32	(9)	63	(9)	34 (9)

平成19年度医学部保健学科入学状況

（ ）内は女子で内数

保健学科	専 攻	試験区分	入学者数	内 訳		
				道内高校出身	左記以外	現 役
	看護学	前期日程	61(51)	52(44)	9(7)	37(32)
		後期日程	14(12)	13(11)	1(1)	9(8)
	放射線技術科学	前期日程	33(5)	28(5)	5(0)	18(4)
		後期日程	8(5)	6(4)	2(1)	5(4)
	検査技術科学	前期日程	32(21)	26(19)	6(2)	21(17)
		後期日程	7(7)	4(4)	3(3)	6(6)
	理学療法	前期日程	16(8)	8(3)	8(5)	11(5)
		後期日程	4(2)	3(2)	1(0)	3(2)
	作業療法	前期日程	15(9)	10(7)	5(2)	10(6)
		後期日程	4(3)	1(1)	3(2)	2(2)
	計	前期日程	157(94)	124(78)	33(16)	97(64)
		後期日程	37(29)	27(22)	10(7)	25(22)
	合 計		194(123)	151(100)	43(23)	122(86)
	【参考：18年度】		195(109)	148(90)	47(19)	109(73)

◆ 第101回医師国家試験合格状況 ◆

第101回医師国家試験合格者について、去る3月29日（木）厚生労働省から発表されました。

本学部の合格状況は、受験者115人、合格者99人、合格率86.1%でした。新卒・既卒の内訳等は次のとおりです。

	受 験 者	合 格 者	合格率	全国平均合格率
新 卒	102人	91人	89.2%	92.3%
既 卒	13人	8人	61.5%	48.4%
合 計	115人	99人	86.1%	87.9%

今年度の合格率は、既卒は全国平均を上回ったものの、残念ながら新卒は全国平均を下回り、全国医学部80学部中57位の結果となりました。

なお、既卒者で合格した方は、18年3月卒業者6名、平成16年3月及び平成15年3月卒業者各1名の合計8名でした。

◆ 平成18年度 大学院学位授与状況 ◆

		学 位 授 与 数 （課程修了者数）			
		6月30日	9月25日	12月25日	3月23日
修 士 課 程	医 科 学				29
博 士 課 程	病 理 系				
	内 科 系		1		
	外 科 系				1
	生 体 機 能 学			1	4
	病 態 制 御 学	3	1	1	26 (2)
	高 次 診 断 治 療 学	1		2	23
	癌 医 学	3	1		9
	脳 科 学			1	2
	社 会 医 学		1	1	4
	計	7	4	6	69 (2)

（ ）内は内数で短縮修了者数

	学 位 授 与 数			
	6月30日	9月25日	12月25日	3月23日
論 文 博 士	3	1	2	4

◆ 医学部学士学位記伝達式 ◆

平成19年3月23日（金）午前10時から大学主催の学位記授与式に引き続き、午後1時から本学部臨床大講堂において、学士学位記伝達式が挙行されました。

伝達式では、本間医学部長から卒業生一人一人に学位記が手渡され、次いで、本間医学部長の告辞、齋藤医学部同窓会会長の祝辞の後、卒業生を代表して、総代の長尾幸衣さんから答辞が読み上げられ、6年間の感謝の意と新たに医師・医学研究者として羽ばたく決意が述べられました。



◆ 平成19年度 医学科新入生合宿研修 ◆

平成19年度の医学科新入生合宿研修が、4月7日～8日の2日間大滝セミナーハウスにおいて実施されました。

メンタルヘルスケアやアルコールの正しい飲み方

(パッチテスト)などの講演や履修ガイダンスなどが行われ、新入生歓迎実行委員の2年次学生と共に、終始和やかな雰囲気で行われました。

◆ 平成18年度 各種助成の採択状況 ◆

平成18年度 助成金獲得状況

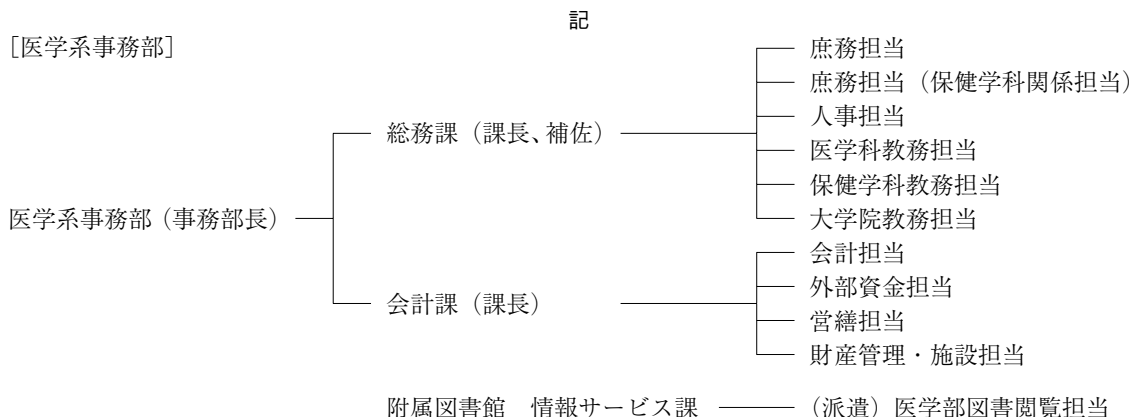
財団法人等	種別	氏名
秋山記念生命科学振興財団	財団賞	大野重昭
	一般助成	本間さと
	奨励助成	西屋 禎
		西原 広史
		北市 伸義
		新開 大史
伊藤医薬学術振興財団	学会等助成	吉岡 充弘
	海外等研究者招聘	本間さと
	海外学会等出席研究交流助成	中山 章
		古川 洋志
		馬 明月
	海外留学研究交流助成	山崎 修司
ノーステック財団	共同研究補助金	中野 記嗣
	研究開発シーズ育成助成金	笠原 正典
	若手研究補助金	松本 美佐子
持田医学薬学振興財団	研究助成金	新開 大史
		田中 伸哉
内藤記念科学振興財団	奨励金 研究助成	絹川 真太郎
安田記念医学財団	研究助成	渡辺 雅彦
	研究奨励金	笠原 正典
かなえ医薬振興財団	研究助成	榊 康一
臨床薬理研究振興財団	研究奨励金	矢部 一郎
神澤医学研究振興財団	研究助成金	古本 智夫
上原記念生命科学財団	研究助成金	畠山 鎮次
	研究奨励金	田中 伸哉
		大場 雄介
	リサーチフェローシップ	外丸 詩野
公益信託小野がん研究助成基金	研究助成金	藤本 勝也
日本リウマチ財団	リウマチ性疾患調査・研究助成費	東 梅友美
		石津 明洋
		小野寺 伸

◆ 事務組織の変更について ◆

平成19年4月1日で医学事務部と遺伝子病制御研究所事務部が統合され、「医学系事務部」（統合後の事務部の

名称）となりました。

医学系事務部の事務組織は、下記のとおりです。



広報室便り

今年度より、東北棟が完成した折には、その一階に医学研究科広報室ができます。仕事の内容は、広報に関すること一般で、ホームページに関すること、広報誌に関すること、いろいろな医学研究科の情報誌作成のためのデータベースを構築すること、などです。今年の室員は、近江谷克裕先生、山本有平先生、田中真樹先生、佐藤松治先生です。

7月1日からは、鈴木正己さんが同室所属の技官として配属され、今後の広報室の現場の主役になります。今までHPやメールサーバーの管理を一手に引き受けて、我々を支えて頂いてきた佐藤松治先生には、IT担当委員として活躍して頂きます。

ホームページは、今年の秋には趣きを一新し、医学研究科のすばらしさをリアルタイムで伝えていけるようにしたいと思います。また、医学研究科の広報のためのデータや画像を、皆様が利用できるようにしたいと思います。広報誌では、近江谷編集長を中心に、保健学科の委員とともに、ビビットな情報をお伝えしてくれると思います。

広報室員一同、忙しさの中、はりきっておりますので、ご支援のほどよろしくお願い致します。

広報室長 白土 博樹

編集後記

新しい編集委員会が立ち上がり、新任の広報編集長として、何とか第31号をお届けいたします。医学研究科・医学部の挑戦する試みとして医学研究科内には広報室が設置され、この広報も、白土室長のもと充実をはかっていきたいと思います。その試みの一つが年3回の発行が、年4回となります。皆さんの近況や今後の動向を含めて時機に、そして時季に適った内容をお届けしたいと思います。何卒、ご協力のほど宜しくお願いいたします。最後になりますが、御多忙の中で、原稿を寄せていただいた皆様に心から感謝いたします。

（近江谷克裕）

—— Home Pageのご案内 ——

医学研究科／医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho//index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

kouhou-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学系事務部総務課庶務担当
電話 011-706-5892
編集委員 近江谷克裕、山本 有平、田中 真樹
佐藤 松治、西岡 健、平塚 志保